

特殊救難隊

映画『海猿』のモデルとしても有名な特殊救難隊は、転覆した船舶や火災を起こした危険物積載船などにおける人命救助や火災消火など、高度な救助技術と専門的知識を有するスペシャリストチーム。各隊1名ずついる救急救命士を含む6隊36名編成で全国の特種な海難に24時間即応体制で対応している。平成27年度で発足40周年を迎えた。



MLIT
体験
レポート

海上保安庁に関する詳細はこちら
<http://www.kaiho.mlit.go.jp/>

海上保安庁特殊救難隊

ゲスト 永島昭浩さん（スポーツキャスター）

海難救助のエキスパートである特殊救難隊。

その厳しい訓練に、永島昭浩さんが特別参加しました。

この日の訓練は、船の倉庫に倒れている負傷者を

甲板に引き上げるという想定での救助作業です。

現役時代、僕が「勝負」でここ一番の仕事をするのは、何月何日の何時からどこで試合をするかが決まっています。しかし特殊救難隊の仕事は、いつでもどこでもどんな災害が起きるか、まったく決まっていません。

人命に関わる非常に重要な任務が突発的に起きるといふ状況でありながら、いつも最高レベルの仕事を要求される。これは「難しい」の一言では済まされないくらい大変なことで、本当に頭の下がる思いだと、この体験で実感しました。

訓練してみると救助作業は力だけではなく、集中力と臨機応変な判断力も必要で「次に何をすべきか」を考え続ける頭のスタミナも要求される仕事だとよく分かりました。メンバーは常に自分が今何をしているかを伝え合い、次の行動目的をきちんと情報共有して作業します。今日初めてお会いした皆さんと一緒に訓練させていただいたけど、全員が一つの体のように互い

このレンジャー訓練では15mの高さを降下し、動けない負傷者を担架に乗せ、ロープで吊り上げ救助した。訓練とはいえ隊員の1人を救助対象者役で実際に吊り上げ、本番同様の確実な作業が要求される。訓練内容は毎回異なり、救助人数や負傷状況、使える道具の制限などが変化。この日の訓練では、高所に滑車を設置できず、吊り上げ後の担架の引き上げが難しい状況を再現した。



隊員たちが訓練の合間に休憩するスペース、通称「オアシス」の壁に掲げられた特殊救難隊のロゴマーク。特殊救難服の右肩には日の丸、左肩にはこのロゴマークが付いている。



「引けー!」の掛け声で足並みをそろえ、ロープを引く永島さん。ロープは滑車を利用して固定することで、2分の1、3分の1の小さい力で引くことができるが、逆に引く長さが2倍3倍になるため、滑車を利用し過ぎるとタイムロスとなる。固定する時点で現場の状況に合わせた判断が要求される。



青のロープは救助者を確保する隊員の降下用。オレンジは担架の吊り上げ用。白は担架にもう1本つないだ予備の安全用と、それぞれの使い分けを現場で決め、適切につなげる。



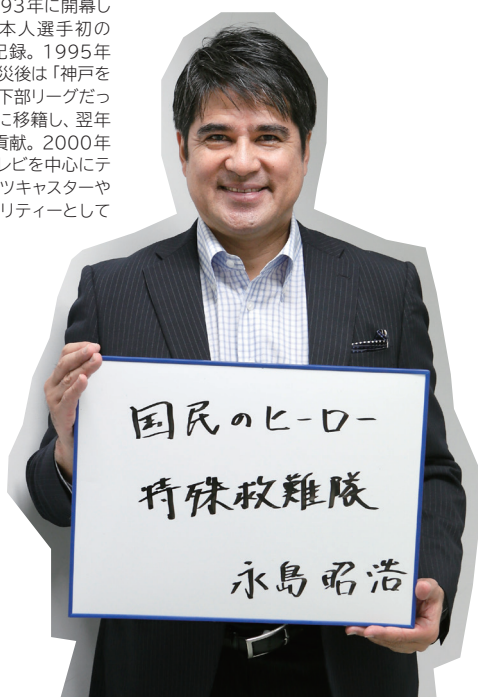
負傷者の救助後も、降下した隊員を引き上げるまで気を抜くことはできない。



約40分の救助訓練が終わり笑顔に。

永島昭浩 (ながしま・あきひろ)

神戸市出身の元サッカー日本代表選手。サッカー解説者、スポーツキャスター。1993年に開幕したJリーグでは日本人選手初のハットトリックを記録。1995年の阪神・淡路大震災後は「神戸を勇気づけたい」と下部リーグだったヴィッセル神戸に移籍し、翌年のJリーグ昇格へ貢献。2000年の引退後はフジテレビを中心にテレビ番組のスポーツキャスターやラジオのパーソナリティーとして活躍中。



に連携して機能するのを感じることができました。一瞬も無駄にできない、ひしひしとした緊張感はまさに現役時代の試合をやっているような感覚で、素晴らしい体験でした。

40年の歴史を持つ特殊救難隊に殉職した方が一人もいないのは本当にすごいことです。こうした訓練を通じて大事なものが引き継がれているのだらうと、そう感じるものがありました。

昨年の鬼怒川の決壊でも特殊救難隊の活動が報じられました。日本は災害が多く、今後もいつ何が起るか分かりません。防災が進んでも、きつと彼らの仕事はなくならないでしょう。特殊救難隊はいわば日本のヒーロー、世界のヒーローです。私たち国民にとって本当にありがたい存在だと改めて感じました。(談)

第三管区海上保安本部の横浜海上防災基地には特殊な救難状況を再現、訓練する施設が整備されている。海上のような複雑な波と風を再現できるA水槽(上)。深さ10mの潜水を行えるB水槽(左下)。C水槽(右下)では、沈んだ船底に水中で穴を開ける作業を訓練できる。

